

佳作

共振
たとえ

揺れている。左右か、上下か、そのどちらかに、その両方に。いつもの、ひどい家鳴りだと思っただけで、違った。感じるのは音だけではなくて、身体が振動に乗っているのがわかる。よく知りもしないのにきちんと恐怖のメロディが枕元で流れている。手を伸ばして布団を探索するが、掴めるのは柔らかいところだけ。

くっついた瞼の隙間から影がぼんやり。白い頭。黒い腕。叔父が僕の顔を覗き込んでいる様子が僅かにみえる。僕をみている？ ついさつきまで確かに頬にあつた熱の感触が、だんだんとほじめていく。僕は目を覚ましたのか？ 光は、まださしてこない。きつとまだ真夜中なのだろう。いつの間にか揺れはどこかへ消えていて、僕はまた布団に溶けていった。

夜中に地震あつたよね、と洗い物をしている叔母に訊く。皿の擦れる音に紛れて、全然気づかなかつた、と言われる。目の前の叔父は、本当に食べているのかと疑うほど静かに、静かに口を動かしている。その大きな身体から、小さな所作をうむ指先。僕はもう一度、箸をきちんと持つようにして、小鉢を手にとる。

ああ、落としたひじきが太ももで冷たい。制服の黒に、さら

に黒いシミをつくる。叔父や叔母には、いちいち落ちたことは言わずに、拾い上げたひじきを奥歯できちんと噛んでおく。たぶん、この音は僕にだけしかきこえていないし、大丈夫だと思う。後は遠慮せずに綺麗に食べきればいい。

昔過ごしたことがある光景とは、どこか違う。けれど、ここは僕のイメージするような家族の朝。そこからはほとんど逸脱していかないと思う。少しかだけ食卓は静かだけれど、僕の心も無事に平静なので、これといって問題はない。

この生活は、小学生の頃から続いている。叔父と叔母に引き取られたのは小学校二年生の時だった。両親が亡くなった後、親戚の中で真つ先に声をあげたのが叔父夫婦だった。ほとんど話したことのない叔父夫婦が、率先して僕を引き取るうと決めたときは驚いた。

僕が小さいころから会ってはいたが、お正月にうちの家に来るくらいで、お年玉をもらった時に僕の頭を大きな手で撫でる、それだけが唯一のやり取りだった。それでも、お年玉の額は親戚の誰よりも多く、その大きな手も全く気にならなかった。

初めてこの家に来た日、叔父と叔母はえらく緊張している様子で、僕のことを壊れ物のように扱った。言葉のクッションで

何度も何度も包む。中身がみえなくなると思うくらい包んでから、ようやく子どもにかけられるような言葉をくれる。そのぎこちなさに、時には嫌気がさしたけれど、ここで生きていくしかなかったので、結局ここで生きてきた。今、僕は居心地が悪いわけではない。ただ、家族の会話というものが少なく、寂しくもあった。

「行つてきます」

「あ、お弁当」

明日は給食がない、というのが昨日の晩の会話に僕が選んだテーマだった。僕から話しかけたからなのか、いつもよりも会話は弾んだ。叔母は何が食べたい？ ということをしつつこいぐらいに僕に訊いてきて、僕は冷凍庫に余っていた冷凍食品の中から好きなものを指さした。そのとき、叔父は同じものにしてくれ、とテレビに向かって言った。

そして今朝、いつもは一つしかないお弁当箱が二つ、親と子みたいなサイズ感でテーブルに並んでいた。黒ゴマがらせん状に舞っている、梅干しを神々しい原点として。そのとき、僕はもちろん小さいほうだろうなど思っていた。しかし、今、叔母からは大きいほうのお弁当が差し出されている。

「こっちのほうなの？」

「食べなきゃ。育ちざかりなんだから」

うん、と僕は玄関の向こうをみて呟いた。この辺だなと思うあたりでお弁当を受け取る。背中、いつてらっしやい、が今暖かい。一方で、ひじきの跡がまだ冷たい。

ぶおお。車窓の向こうが真つ暗になって、顔、顔、顔、顔、顔がぼうつと浮かび上がる。たくさんの人の中で、自分の顔が揺れている。ひと際ぼんやり映る、僕の顔。来年、高校生になるとは思えないほど幼い。まだ、成長期がきていないような顔をしている。背は隣のおじさんを追い越すだろう。もう少し肌はがちがちとしていく。そのうちに髭が硬くなる。たぶん、この声もまだまだ、低くなる。そんなことを、人の体温に採まれながら考える。

まただ。その生温さを腰あたりに感じる。それは、僕の身体のどこがどうなっているのかを知っているように、丁寧になぞっていく。はねた、とんだ、すべった。なんだか喜んでいたい。やがて、難しい手つきをして僕の中へ入ってくる。そんな手なのに、大事なものを扱うように僕はほぐされる。電車の揺れにあわせて、僕は身をよじらせる。

この手のひらは、何を求めているんだ？ 僕の長い髪に騙されているのか？ それとも、本当は男だつてことを、よく知っているのか？ どんどん身体が熱くなつてく、駄目になつてく。ぼんやり映る、僕の顔。その造りが、僅かに歪んでいる。もう少しだけ右に、もう少しだけ左に、それぞれのパーツが動いてくれれば、美は生まれる。たつたそれだけで、きつと美は作り出される。

車内アナウンスが何かを言っているのに気づいて、手のひら

は浸食をやめた。僕の顔は消えて、今はビル、ビル、ビルを映している。電車は動きを止めて、軽快なメロディとともにドアが開く。一度決壊した電車の後に、もうほとんどその熱さは残っていないかった。

午前と午後の授業中、その両方で、怖くなるほどの揺れがあった。午前の授業中、はじめは先生も生徒も揺れに気づいていない様子だった。僕が気づいてから、数十秒して、教室はざわつきはじめた。地震、地震、と『さしすせそ』を急いで小さく言うみたいに声を潜めて、それでも地震の揺れと同期するように皆の声は大きくなった。声が大きくならなかつたら、地震はそれほど怖くなかったのではないか、そんなことを思いながら、先生の指示に従って、机の下に閉じ込められたみたいに丸くなる。

揺れている教室の中で、どこを見ればわからず、安祐美あゆみのつま先を見つめる。僕とは違って、怖がっていないさそうので、目が合うと余裕の笑みをみせていた。僕たちはそんな秘密のやり取りを、揺れている間、ずっと続けていた。中学生の男女、閉じ込められた檻の中、互いに見つめあっている。

両手で檻みたいな机の脚を掴み、互いに互いが収まっているのを確認する。振動で机の中から落ちそうな教科書が、今にも安祐美の背中に直撃しそう。ズツ、ズツ、と姿がその見えてきている。安祐美はそれに気づいていないようで、ずっとこちらを

見ている。

もしも安祐美の家で地震が起きたら、安祐美は両親に大事に守られて、怪我の一つもしないのに、それでもピアノの鍵盤の調子が悪くなったの、と嘆くのだろう。

午後の地震の時は、揺れはそこまで大きくはなかった。しかし、先生は慌てふためいて教室を飛び出し、それに続いて何人かの生徒も廊下の角に消える先生を追いかけようとしていた。先生は緊急の放送を入れるのかと思えば、単に一人だけ校庭に避難してただけだった。校庭には各クラスの生徒たちと先生が、綺麗に列を作って待っていた。僕らのクラスだけが生徒が疎らで、貧相な隊列になっていた。先生は帰ってくることが、ばつが悪かったのか、職員室で待機していたらしかった。先生が消えた教室は、ふざけだす者、現状を心配する者、不満げな態度を示す者、といったように多様だった。やつと教室の扉ががらりと空いて、先生が教壇に居直った後、ぼんやりと授業が再開され、皆は冷めた目で先生をみている。

そのとき、僕はまだ安祐美のつま先をみている、半分脱げた上靴はぶらんぶらんと宙を泳いでいた。視線を送っているわけでもないのに、僕が安祐美の顔に目をむけると、いつだって目があつてしまう。頬杖をつけて、わざわざこちらを見ているあの子の姿に、車窓に映る自分の顔を重ねてみる。あの子も、あんなふうな顔をつくるのだろうか。あの子のどの部分をどうしたらそうなるのだろうか。難しい数式の隣に、その顔を丁寧に描いていく。完成した顔を色んな角度で眺めてみるけれど、苦

痛を感じているようにしかみえない。

放課後は、鋭く高鳴る。一番聴覚が敏感になるような時間。見えなくても、触れなくても、十分に感じられて、ひどく気分が沈む。何か僕らにもあるかもしれないと思い、なんとなく帰宅部は学校に残る。けれど、たいていそこには何もなくて、いつでも何かが起こっても良いようにその時を待つ。そのため無為なおしやべりは、たまに迷子になったりして、その隙間を埋めるために、必死に言葉を探す。

僕はそうはならない。その裏側に、また別の時間が流れているのだ。中学生同士の秘密の時間。たいてい、放課後は安祐美と体育館の入り口に伸びる階段に腰掛けている。ここは、飛び交う硬式ボールや、何度も揺れるゴールネット、どんなものでもみえる。耳だけ澄ましていると、瞼の向こうからくる謎めいた光で眩しい。けれど、いざ五感を使ってみると、本当は眩しいだけじゃないことがよくわかる。彼らは、何度だってこけてしまうし、ボールだってほとんど上手くとれていない。ほら、いま、泥のはねたユニフォームに、まだ新しい泥がシミをつくっている。

「ね、悠斗君」

同級生と比べて、少しだけ高いと思っていた僕の声。安祐美の声は、その上をいく。

「国語の時間ね、笑っちゃった」

「え？」

今日の国語の時間、先生から指名されて朗読したことを思い出す。

「木村、つてきいたら、全部悠斗君みたいに思えてきてさ」

どうやら物語の登場人物の名前がツボに入ったらしい。

冬の終わりに木村一家は火事に見舞われ、家財の一切を失う。無一文になった木村家は、それまでは薄情だった家族のひとりひとりが互いに向き合うことを試されて、そして経済的には不足があるものの、精神的には充足された形で終わる。悲惨な話なのかもしれない。しかし、物語の中で、木村一家は一つ前に進んだようだった。

「僕を貧乏にしたいの？」

僕は微笑みかける。あと数センチで理想になるはずの、この顔。

「そうじゃないけどね。でもさ、好きな人と登場人物を重ねると、ストーリーが入ってくるんだよ」

「それはわかるかも」

安祐美が話をふって、盛り上げて、沈黙がおとずれる。この手続きをいつも何度か繰り返し返す。会話が嫌なわけじゃない。けれど、いつだって言葉は出てこない。

「日曜日、あいてる？」

本当は安祐美の日曜日の予定はどうでもよかった。でも、こうして予定を訊くと、安祐美は大概、身を乗り出して僕のことを見る。

「ごめん、日曜日は家族と出かけるから」

想定した返事と違つて、僕はその次の日曜日は、と訊きかけるが、返答が怖くて、舌を強く噛む。家族。その言葉に、僕はひどく敏感になる。急に安祐美がいじわるな人間に思えてきて、腹が立つし、虚しくもなる。

スマホが震える。

「ちよつと、ごめん」

近づいた瞳になんとか笑いかける。

『お弁当、どうだった？』

一瞬、叔母からだと思つたが、叔父からだつた。なぜ叔父からお弁当の感想を求めるメッセージがくるのだろうか。

『おいしかったよ』

指を素早く滑らせる。

「誰から？」

安祐美は覗き込まないようにして、僕に鋭い声で訊く。両手を組んで、それをきちんと畳んだ膝の上に置き、上目遣いで僕をみている。

「お父さん」

「お父さんとやり取りするの？ 珍しいね」

珍しいね、の「ね」が強く止まった。気味悪がられているのだろうか。でも、少ない日常会話の中の、ほんの一つなのだ。安祐美の目の前で、僕は叔父からのメッセージに嬉しくもあつた。

「たまにね」

「たまに」

普通は、お父さんとなんか連絡しないでしよう、という安祐美の表情を想像する。

「お父さんとのやり取りのほうが多かつたりして」

「それはないよ」

僕は叔父とのやり取りを安祐美にみせる。あくまで操作しているのは僕で、安祐美の顔の前に慎重に差し出す。スマホをスクロールする僕の手つきは必要以上に速くなつてしまつている。安祐美は、ふうん、と言つと、ゴールネットへと首を向けた。そろそろ帰ろうかな。

そう思うものの、口には出さない。安祐美もきつとそう思っているのだろうか。よく知らないキャラクター達が一齐に首を吊っている鞭それはずつと安祐美の肩にかかつたままだから、いつでも立ち上がり、この場を去ることはできる。でも、そうしない。そうしない二人が、結局ここで無為に時間を過ごしていることに気づく。運動部をひたすら見続けるなんて、その視線の先に好きな人でもいなければ全く退屈な行爲だろう。

「ねえ、悠斗君ってさ……」

湿つた風が吹いた。かなり長くなつてしまつた髪のが、口元にふれた。

「ずっとここにいなんだよね？」

安祐美が僕にそう訊ねた。たぶん、僕の顔をみている。いくつか数を数える。数字が大きくなるにつれて、ここがどこなのか、わかるようになっていく。

また、湿った風が吹いて、ぽつ、僕の太ももに水滴が落ちる。今朝の、無念のひじきを思い出す。次の水滴が落ちると、また次の水滴が落ちた。そうした調子で雨は僕らを急がせた。ちゃんと帰る理由ができた。僕は身体を持ち上げて、雨だ、ときちゃんと呟いた。

「帰る？」

「きつとこれから強くなるから、いまのうち帰ろうよ」

「もう？」

もう？ の「う」が高く上がって耳を引つ掻く。少し前まではこんな言い方はしてこなかった。

そうしている間にも、雨音は強くなつていつている。このままだどこかに雨宿りはごめんだ。

「わかった。帰ろう。傘、あるの？」

「あるよ」

「わたしの傘大きいよ。入ってく？」

「いいよ。大丈夫。自分の傘で帰るから。それに帰る方向違うでしょ」

安祐美の表情はここからはみえない。その手は確かに大きい傘を開こうとしている。中学生の女の子には似合わないくらい、ずっしりと、暗い、そんな傘の柄を安祐美が持つ。

大きな傘から伸びる細い足が、僕とは違う方向へ歩みだすのを確認した後、僕は僕の帰り道を進んだ。遠くで雷が鳴りだして、あたりは暗くなつていく。ぼとぼとと頭上に礫のようになつて落ちる。僕はまだ小さな水溜まりをいくつか飛び越えて、早

足で駅へ向かった。

枯草色の椅子に腰かけて、雨に濡れた街が流れていくのを見つめる。今朝よりもずつと軽快に電車は走っているみたいで心地よい。雨に打たれながら自転車走らせる人を車窓から見送ったころ、どさりと人の頭が僕に垂れてきた。髪のない頭が左肩で重たい。僕はピンボールをはじめくみたくに左方に力を込めて跳ね返した。その頭は急激に失速して、ちょうど良い具合に垂直になった。ごく普通のおじさんの顔がそこにはりついていて、眉をびくりと動かしている。起きるか、起きるか、起きるか、と見守っていたが、結局起きず。次にこちらに倒れてくるのかを気にすることが、いちいち面倒に感じる。

この顔に、僕がキスをしたらどうなるのだろう。ふと浮かんだ想像が、何やら危険めいていて、少しだけ怖くなる。たまに、自分の発想が突拍子もないときがある。きつと意味はもつてないけれど、意味が生まれてしまいそうな感触を持つ。

僕の口はおじさんの口を塞ぎ、途端に苦しくなつたおじさんは目を覚ます。そこには僕の顔があつて、おじさんは一瞬戸惑うも、僅かに力を抜いて受け入れる。それを見た僕は、満足げに舌を入れていき、出せるものを全て吐き出して舌を引っこ抜く。抜け殻のおじさんに、どうだった？ と訊く。おじさんは何も言えないで息を整えようと努める。

活発に出てくる自分のストーリーが怖い。後はもう実行する

だけで、引き金は簡単にひくことができる。その現実味が狡いときえ思う。もしかしたら、いつのまにかそんなことを実行しているのかもしれない。いつの日か、そんなことをしてしまつたのかもしれない。

軽快なメロディとともに車内のドアが開く。おじさんはそれを知っていたかのようにぱちりと目を開き、咳払いを一つして、二歩三歩ぐらゐで出て行つてしまつた。髪のない頭が雨に濡れて、その後は車窓の枠から途切れて終わり。見知らぬおじさんは見知らぬおじさんのまま見知らぬ街へ消えていつた。

僕にキスをされたほうのおじさんは、果たしてそのままのおじさんだったのだろうか。きつとまだ電車に乗つていて、僕のことを見つめはじめ。どうする？ 視界の隅で僕をみて、僕なことと言う。僕は、どうでもいいよ、とだけ言い放つ。雨が止んだどこかの駅で、僕たちは二人揃つて降りる。おじさんは僕の肩を抱き、僕に向かつてこう告げる。ねえ帰るところあるの？ 心憂う僕はさもありなんといつた顔をして、駅から見える誰かの家、家、家、家へと、視線を移していく。

踏切の前で、スマホが震えた。カンカンカンカン。遮断機が下りてきて、眩しく赤と赤が交互に点滅する。自転車のブレーキ、駅へ急ぐ人の舌打ち、車のエンジン音が僕の辺りでとどまる。スマホを取り出すと、光の中に叔父からメッセージがぼうつと現れている。

『日曜日、空いてるか？』

日曜日、空いているか？ のメッセージの少し上には、また別の、日曜日、空いているか、がある。直接訊かれない日曜日の予定に手の動きを止めてしまふ。これに対して、空いている、と素直に答えたことがなく、少しだけ申し訳ない気持ちになる。叔父はずつと歩み寄つてくれている。あの人は、不器用なだけなのかもしれない。

遮断機が上がつて、滞留していた空気が拡散していく。この流れにのつて、前に進まない、この狭い道は人でつまつてしまふ。僕は『空いてるよ』と打ち込み、街のペースに戻つた。

叔父や叔母は後悔していないだろうか。僕のために稼ぐことを、ごはんを作ることを、休みには僕と密にかかわるということを。たまには思春期の僕に頭を抱えることもあるかもしれない。たいして思春期らしさを出してはいないつもりだけど、かえつてそれに頭を抱えていることもあるかもしれない。僕にはわからないことがたくさんある。叔父と叔母にとつても、僕はわからない存在なのだろう。例えば、それ自体が、喜びだということはあるだろうか。一体、親とはどういうものだろうか。そういうものだろうか。僕がそんなことを考えるのは驕りだろうか。

来年、僕は十六になる。あの家を出るかどうか、ということ、頻繁に考えるようになった。この機会を逃すと、次の機会は三年後までやってこない。勿論、誰一人として頼る親族は他にはいない。あの時、受け入れてくれたのは、叔父夫婦だけだつ

たから。だから、いざとなれば一人で生きていくしかない。きつと、僕はここにいるということが、ひどく下手くそなことだと思う。無邪気に過ごすことも、何も知らない顔でいることも、ただ狡く生き続けることも、どれも僕にとつては難しい。

「ただいま」

引き戸をひくと、漂ってきたのはカレーの匂い。キッチンの大鍋を覗いてみると、具沢山のさらさらなカレーが、深さ知れず、火にかけられていた。この後、僕の皿にはなみなみと盛られて、おかわりは？ と訊かれるだろう。僕は大丈夫、とこたえて、家族の会話は一度止まる。間を埋めるのはたいていテレビのニュース、幾度も持ち上げられては据え置かれる食器の重み。

居間のほうに見慣れないシャツがかかっている、これお父さんの？ と僕は叔母に訊く。

「ああ、お父さんがね、これをすぐに洗濯しといてつて。そんなこと今朝言ってきたね、雨の日のなのにね」

言葉は不満を漏らしているのに、言い方は上機嫌だった。叔母は冷蔵庫を開いたり閉じたりを繰り返している。ただそれだけを行っているみたいに見える。なのに、夕食の準備はみるみる整っていく。

ぶら下がった黒地のシャツの胸元には鰐のロゴが貼り付けられていて、その緑がワンポイントになっている。鰐は大きな口

を開けていて、その口の中は、ほとんど点のような赤がある。それなのに、本物みたいな歯がぎっしりと敷き詰められていて、気味が悪い。それに、キッチンと居間のあいだにぶら下がっているから、少し邪魔に感じる。さらには、いちいち鰐と目が合ってしまうような気がして、心地が悪い。

叔父はまだ帰ってきていないみたいだった。僕は普段叔父が座る席にあぐらをかいてみた。左隣にひとまわり小さな僕がいて、もそもそと食べ物にありつく。箸遣いが未だなっていない、ぼろぼろと米粒を膝に落とす。たまに煮物の汁も落として、取れそうにないシミを畳につくる。そんな生き物へのあたたかい眼差し。想像するのが難しく、僕は自分の定位置に少しずれる。しばらくのあいだ、叔父に見られる練習をする。叔父はまだ帰ってこない。

食事を済ませた後に、すぐにお風呂に入るのはつらい。食べ物が胃で煮詰まり、のどの奥から食べ物のおいが漂ってくる。食べることは美しいのに、僕の身体が食べ物で消化し、排せつへと向かっている、それを認識させられることにひどく嫌悪感をおぼえる。それでも、雨に冷えた身体を暖めたかった。だから、いま僕は湯船で自分の膝小僧を眺めている。身体の中でも、数少ないその曲線を僕はなぞっていく。左から右へ、右から左へ。それが済んだらまた左から右へ、右から左へ。成長とともに、少しずつ変化してきた僕の身体。けれど、膝だけはまだまだ丸い。

揺れた？

たぶん、大した揺れじゃない。地震に慣れきった身体は本能的な不安を潜め、僕を湯船に居直らせる。けれど、僅かに波打っていた湯船は、次第に跳ねるようになっていった。正直、強がっているが、少し怖い。特に、お風呂場でこんなに揺れるなんて。こんな狭い箱の中に裸で閉じ込められている。今裸のままお風呂場から出てしまうと、まず叔母に見られてしまうだろう。それは避けたい。バスタオルでも巻いてどうか。それとも、いつか映画でみたように水の中に潜っていれば大きな衝撃はいくらかやわらぐはずだ。でも水の量は圧倒的に少ないけど、どうする。

揺れの勢いが増していき、シャンプーやリンスのボトルは滑りながら浴槽と壁の間で跳ね返りつづけている。掴まるどころがバスタブしかなくて、両手で身体をバスタブの内側へと身体を引き寄せた。遠くで叔母の音がする。たぶん、叔母も部屋のどこかで何かに掴まって、揺れが収まるのを待っているのだろう。きつと、大丈夫。もう少しこうしていれば、大丈夫。脱衣所に黒い影がみえたと思ったら、間もなく、叔父がお風呂場の扉を開いた。

「大丈夫かっ」

切迫した様子の叔父は、僕の表情をみてさらに焦っているようだった。僕の無事を確認できた叔父は、姿勢を崩しながらお風呂場へ滑り込んでくる。そして、ちょうど僕と同じような体勢でバスタブに掴まる。すぐ近くに、叔父の顔があつて、こんなときもぎこちない思いをして、手入れしていない髭に目線を

やる。うつすらと白みがかつている。一度、叔父の目をみると、当然のようにこつちをみていて、揺れに耐えているのも相まって、叔父はどこか必死なようにみえた。僕は叔父の目と髭を交互にみていた。その間、たぶん叔父はずっと僕の目をみていた。揺れが収まったお風呂場に、服を着た大人と、服を着ていない子どもがいる。僕は透明な湯船になんとか身を隠すように丸まったまま。叔父は、大きかったな、大丈夫か、などいいながら、僕の様子を確認する。

もう、揺れは、収まっている。

なかなかこの場を離れようとしめない様子の叔父に、僕は身動きもとれず、言葉も許されず、ただいちいち頷くばかりだ。何より恥ずかしいのは、叔父は服を着ているということだった。一方的な防戦なので、叔父の視線はいちいちずるい。叔父が僕のどこをみているのかはよくわかる。何を考えているのかは全くわからない。

叔父は僕にける声をすべて出し切った様子で、大丈夫そうだな、もう行くからな、と言った。言ったものの、ぎりぎりまで僕のことをじつとみているように感じる。僕はすべてをみられてはいないだろうと思いが、うん、と愛想なく呟く。叔父のチノパンに跳ねた水滴が点々、それがお風呂場から去った後に、僕は潜っていた身体をなんとか解放する。

役に立たない柔らかい湯を両足で蹴り上げる。湯が水面から二つ隆起する。僕は深くため息をついた。

まだまだ冬の空だ。これだけ陽射しがあるのに、きちんと寒い。窓をピシりと閉めて、叔父が下りてくるのを待つ。古時計がカチカチと鳴る。こたつの上に臍の形を持ったみかんが盛りだくさん。下半身が熱くなって、こたつから出る、また入る、を繰り返す。これが日曜日の居間。ここには、叔母の姿もない。僕は熱くなった身体を思いつき開いて、畳の上に大きく広がった。そこから見える景色は、全部傾いている。

テレビでは最近頻繁に生じる地震について、女性のアナウンサーが怪訝そうな顔を作っている。この女の人、角度で顔が変わるなどと思う。右横から見ると、いつそう美に近づく。隣にはたぶん偉い男性がフリップを変えては説明をして、日本がいかに危険な状態であるかを説いている。

画面右上の白い数字。時刻は二時をすぎたところ。まだ叔父は来ない。使っていないストーブの隣に、お茶が二リットルのペットボトルに入っている。叔父は未だ姿をみせない。まあいいや、と思い、ペットボトルのままべこべこと飲む。

少し、揺れた？
背中では振動を感じる。しばらく経つても、見慣れた緊急地震速報のテロップは流れない。地震に慣れてしまつて、地震でなくとも地震と勘違いしてしまうことがよくある。今回もその類いらしい。

僕はテレビの音量を下げて、おおきくあくびをする。この女の人、この角度だと綺麗でなくなつてしまつた。ああ、こんな

ところで寝たことなかつたのにな。畳に溶けていく僕の身体。いいのかなと思いつつも、ありのままの自分に従つた。

びくつと身体が揺れて、もしかしてと思い、ペットボトルのお茶を見つめる。僅かだが、揺れている。筆筒を背もたれにして、テレビ画面へ目を向ける。何も伝えてはいない。思い過ぎなのか、単純にそれがまだなのか。筆筒はギシギシと音をたて、スマホが途端に震えだす。いかにも警告といったような音が鳴りだして、僕の鼓動が速くなるのがわかる。おい、地震だ、という声が二階のほうから聞こえる。叔父と叔母がとても慌てている様子だ。うわあ強い、叔父が大声をあげている。

「悠斗！」

居間の扉を勢いよく叔父が開けた。その向こうで、叔母が階段の手すりにつかまつている。

「今度のは、本当に強いぞ、伏せろっ！」

叔父はそう言う、大きな筆筒を気にしながら、僕に駆け寄ってくる。僕は両手で頭を覆い、身を守っていることを叔父にみせる。

叔父は立つていられなくなったようで、おおよそ倒れこむように僕に覆いかぶさつた。身体に重さを感じて、少し身をよじらせる。叔父はそのまま僕の横に崩れて、僕は叔父の両手に包み込まれた。

やがて揺れは収まり、叔父の身体の隙間から、ペットボトルが倒れていたり、いくつかの本が落ちていたりするのが見えた。叔父は固まつたまま、まだ僕を抱きしめている。身体を離そ

うとするが、

うまく力が入らない。叔父の呼吸は依然として荒い。

「叔父さん……？」

「……」

どっち？

叔父の胸元の鱗に、何度も問う。

了